KODANSHA NOVELS

伊集院大介の私生活

昭和六〇年一一月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六六〇円

著者—栗本 薫
©1985 KAORU KURIMOTO Printed in Japan
発行者—野間惟道

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一一二 電話東京(〇三)—九四五—一一一一(大代表)

振替東京八—三九三〇

印刷所—大日本印刷株式会社 製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-181218-1 (0) (文二)

月集院大介の私生活

不本薫

講談社ノベルス

ODANSHA NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ブックデザイン＝市川英夫
カバーイラストレーション＝福田隆義
本文イラストレーション＝福田隆義

目次

伊集院大介の追憶 7
伊集院大介の初恋 37
伊集院大介の青春 67
伊集院大介の一日 97
伊集院大介の私生活 125
伊集院大介の失敗 155

伊集院大介の追憶

1

「いまになって、そんなことを云われたって困るね、あんた」

女にしては野太い声が、びいんと寒い室内にひびきわたるかのようだった。

「お互い、承知の上で利子の額は決めたこったし、人を、鬼だどうだ、いったところで、どうなるもんでもないよ。——まったく、人ってのは勝手なもんだ。借りるときはさんざん拝みたおして、何分でもけっこうです、この金がないともう一家そろって首くくりしかないのとそら涙の一つもみせておいてさ。ひとを仏さまのようにおがんでおいて、いざ返すって段になると、しぶたらしぶたらケチをつけて、少しでも長引かそう、出すまいとする。ちょっとは借りたときのことでも思い出したらどうなんだい。ひとをまるで、鬼か蛇のようにいうけど、別にあたしゃ、あんたに貸したかなかったし、貸しさえしなけりゃそうまであこぎ呼ばわりされることもないい。こっちだって、商売でやってんだからね、市村さん。——そのへん、もう少しわきまえて、大人になって貰いたいね。第一、その十万は、何につかいなすった。おおかた、お馬さんにつぎこんじまったんだ、そうだろ、違うの。——あんたにあこぎだなんぞいわれる覚えはないね。まったくないよ。たいがいにしとくれ」

あいての男は黙ってうなだれている。もとより、返すことばなどあろうはずもないことは、双方、承知の上である。誰しも、金を借りるときには、かえすときのことなど極力考えぬようにするものなのだ。「遠藤質店」の看板をそのとき、おずおずとく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ぐって入ってきて、木のカウンターのよこに立った一人の学生が、いきなりあびせられた奔流のような罵詈にめんくらったように立ちすくんだ。

遠藤マサはそちらへ、ちょっとなだめるようにうなづいてみせたが、いったんほとばしり出たことばの渦は、容易なことではとまらなかった。

「全体、これで何回そんなさわぎをおこしていると思いなさる。あんたはそのつどああだ、こうだというけどねえ、考えてもみてごらん。あたしゃあんたの母親でも何でもない、あかの他人だよ？　どうして、他人に、そうつけこんで甘ったれて許してもらえると思うんだい。商売で金をかしてる人間に、困ってるから金はかりますわ、他にもっと面白いつかいみちがあるから、かえすのはイヤですわ、かえせかえせというやつはあこぎな鬼ですわ、それで世の中通るとお思いかい。ええ、どうなの？　一体自分を何だと思ってるのさ、ええ？　返事をしなさいよ、返事を」

声も野太いが、顔もからだも、とにかく野太い――といえばいちばんあたっている女であった。

年かっこうはそろそろ六十路も後半にさしかかろうかというところだが、がっしりしたからだつきのせいか、五十代ほどにも見える。ねばねばした鉄灰色の髪を癇性にうしろにまとめ、小ざっぱりとしてはいるが古い地味なセーターをきて、男のような猪首ともりあがった肩の肉、あから顔の、肉体労働者によくあるごつい顔つきの、そのどこにも、女という生来の性別をしのばせるに足る優雅、やさしさ、おだやかさ、美しさ、のかけらひとつさがしあてることはできなかった。

それは、もう老齢に入ったためだけではない。昔から、ずっと若いころから、遠藤マサはそういった、女として少しでも多く持っていた方が幸福とされているものを、一つでももっていたためしがなか

ったのだ。

あたしのように可哀想な女はいませんよ、と遠藤マサはよく誰かれなしにいった。そういわれても、あいてはべつだん、気にもかけない。そのことを、マサ自身が熟知していたからこそ、マサはそう思ったのだ。もし、好んでどのように生まれつくか、選べるものなら、女として、誰がこのようになりたいだろう。神社の狛犬にそっくりな大きな顔である。並外れて大柄な、頑丈な体格である。その上に、荒くけわしい気性と物云いをもっている。

たおやかな、ほっそりした、あでやかな着物、はやりの洋服に身を包んだ娘たちと、遠藤マサとが、「女」という同じ種属に属している、ということが、冗談のようにしかみえぬ。江戸の昔であれば、そのたくましさと健康を見込まれて、農家の嫁に望まれ、頑丈な農婦として一生をつつがなく送ることもできたかもしれない。事実そういう女はいくらでもいたし、それらに比べれば遠藤マサが、並外れて、見るのもイヤなほどの醜女だったということもないのだ。

しかし、マサが娘になった時代には、すでに人々は、「女」の価値を母の逞しさよりも、女という性の美しさ、華やかさにおきはじめているころであった。はじめから、マサの一生に女としての幸せを予測しなかったマサの父親は、二人の兄たちをつとめ人にし、自分の質屋をマサに遺すよう手配をした。それはマサの父親の愛情の残酷な確かさであったといえる。そのおかげで、一生一度として嫁いだことも、縁談をもちこまれたことすらないまま、遠藤マサは六十六の今日まで、ぶじに遠藤質屋の鬼婆として暮しをたてる苦労を知らぬまますごして来られたのだ。

むろん、父母はとうになくなり、二人の兄も死んでいた。マサはきかれると誰にでも、天涯孤独の身

でね、とこたえるのだった。
父の代からの店は古くてたいしてひろくもないが、きちんと掃除もゆきとどき、カウンターの隅には、安い鶴首に時分の小菊が二本投げこんである。古普請で、妙に寒ざむとした風が吹きこんでくるが、足をすっぽり毛布でつつんだマサには、たいして苦にもならぬようだ。
あとから入ってきた、一見して学生とわかるやせて青白い眼鏡の青年の目に入ったのは、こうした光景であった。こちらは、まだ少年といった方がいいような年で、身なりもたいども初々しい。手には大きな包みを下げていて、質屋に入るのははじめてらしく、珍しそうにあたりを新鮮な好奇心で見まわしている。
それへ、じろりと目をくれて、すぐに目を市村にもどしたマサは、またひとしきり悪口雑言を投げつけると、ようやく満足した。
「ま、どもこもならないってんなら、もう十日かそこらは待ってあげないでもないけどね。どのみち、あたしだって、お金が入って来ないことには困るんだから。しかし、ほんとに、いいかげんにして下さいよ、市村さん。あんた一人被害者づらをして、ほんとはいちばんあんたのだらしなさのおかげで迷惑をこうむっているのは、あんたの女房子供や他人のあたしであって、何もあんたをひどい目にあわしてるようなこと、云われるすじあいは、誰にもありゃしないんですからね。わかったかい、え」
市村は口の中でもごもごと何かつぶやいた。よくよく、わびごとや弁解を口にするのが嫌いなたちの男であるらしい。やせて貧相な男だが、目鼻にはけわしいものがあり、ぬすむように下から女を見上げる目つきには、ねつい憎しみの光がかくれていた。
「さ、お客さんだから、帰っとくれ。この次にゃ、せめて利子だけでも入れてくれなけりゃ、こんどこ

そただじゃすまさないわよ。さあ」
あいかわらず口の中でごそごそ云いながら市村がそそくさと逃げるように質屋ののれんをくぐって出てゆくと、遠藤マサはどっこいしょとかけ声をかけて立ちあがり、奥へ消えた。もういちど出てきたとき、黒い小さなつぼをもっていた。
「この、厄病神め」
云いざま、中身をつかみ、入口めがけて投げつける。なかみは塩だった。パッと白い粉がのれんと戸にあたって散ると同時に戸があいて、行ったはずの市村があらわれた。
「コートを、忘れましたんで」
ぼそっといって、忘れものをとってまた出てゆく。入口にまきちらされた塩に気づかぬはずはなかった。いくらかは、当人の服にかかったほどなのである。しかし、暗い目つきでマサを見あげた市村の顔に表情はなかった。
ふつうなら赤面して云いわけをしそうな、この間のわるい状況にも、遠藤マサはびくともしなかった。うすい眉をつりあげ、厚い唇を少しまくりあげるようにして、市村をじろりと見ただけである。その細い小さな目には、あくまで押し強い、自分の身を自分ひとりの力で守ってきた女だけのもつ凄いようなおちつきがあった。
「失礼したね、あんた」
こんどはちゃんと市村が帰ったのを見とどけて、おもむろにふりかえる。にっと愛想わらいのつもりらしく笑みをみせると、ずらりと金歯があらわれる。
「質入れ？」
「あ、は――はい」
「質草を見せてもらおうかね。物はなに？　ふーん、上着と、オーバかい。――いまから、オーバを出しちまって、これから寒くなるのに、いいのか

い」

学生は青白いほおを少しあからめて、おずおずと、急に金のいることができて、と口ごもった。マサは笑った。

「そりゃま、質屋にくる客はみんなそうだわよ。ふん……学生さんだね。学生証はあるの——ああ、そう——けっこういいとこにいってんだねえ」

それからマサは、つられたように、自分の甥も同じ大学にいっている、という話をした。

「父親——ってあたしの兄だけどね。それが死んじまってからは、てんで寄りつきゃしないよ。お袋ってのが、腹のよくない女でね。なるべく、かかわりをもつまいとしているんだわね。ムリもないけどね。あたしゃこういうあこぎな商売だし、人に好かれるたちでもないからね。いつだって、云いにくいことばかし、ずけずけいうもんだからね。でも性分だから仕方なかろ？　もっとも、そのお袋ってのというちがうまくゆかんようになったのは、あたしがつまんないこと、いっちまったもんで——兄さんがガンになったとき、見舞にいって、そんときゃ、まだ、医者は家のもんにもガンだとはいってなかったのさ。それを、あたしが、手相みてやってね。生命線が切れてるから、こいつは助かんないよっていったのよ。それであねさんが怒っちまってね。いもうとのくせに何てことというかってね。しかしあたしにすりゃ、しょうもあるまい？　嘘はつけなかろ。それで助かりゃまだしものことに、間がわるく、それから一と月ばかしで、ぽっくりいっちまったの。まだ若いんで、思いのほか早く進んだんだね。それをまるであたしのせいのように云って、お葬いにも来るなっていうんだよ、嫂さんが。え、こんな話ってないだろ。どうしたかって、行かなかったわよ。行って、いやみをわざわざきいたってしょうがないやね。ま、あたしは、こういうめぐりあわせなのよ。

可哀想にね。あたしのせいじゃない、たって、わかんないもんにゃ、わかんないね。甥っ子もずいぶん大きくなって、風のたよりにその大学へ入ったってきいたけど、それきりよ。ま、しょうがないね。あたしは天涯孤独になるよう生まれついてるんだよ。しょうもない話をきかせたね。で、いくらいり用なの」

学生は口ごもりながら金額をいった。きくなりマサはからからと笑い出した。

「困ったもんだねえ、学生ってのは。世間知らずだっちゃない。そのお金で新しいオーバが買えるってのに——ま、いいよ、いいよ。初会じゃあるしね。出したげるよ。そら、ひい、ふう、みと、これでよかろ。こっちの紙に、名まえと住所と保証人を書いてね。いいかい、学生さん——あたしのことを、情け深いなんて思うんじゃないよ。あたしは質屋と金貸しを、これでもう四十年からやってるのよ。あこぎでなきゃ、とっくに口かひあかってるよ。このお金はね、あんたを信用してかすんだよ。あんたの人相が気に入ったのよ——それに、あんたが入ってきたとき、うしろに白い光がついてきたからね。あんたは、いいご先祖さんに守られてるよ。ま、そのご先祖さんに貸したげるんだよ。いいご先祖さんをもつのも、本人の甲斐性のひとつだからね」

「あの——あの、何か、なさるんですか、その……占いとか——」

すっかり毒気をぬかれた学生がおずおずと云う。

「そう、ちょっとね。といって、あたしゃもとから霊感がつよくてね。もう少しつよけりゃ、そっちで身を立てたんだが、あたしは一人で新規に何かしてはいけないって運勢で、ま、親ののこしたものを守ってゆくことになったわけさ。いろいろ先生にもついてみたけど、あれで占いってものもいろんな流派

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton